

廃材天国へよ

Series
これから的生活
vol. 7

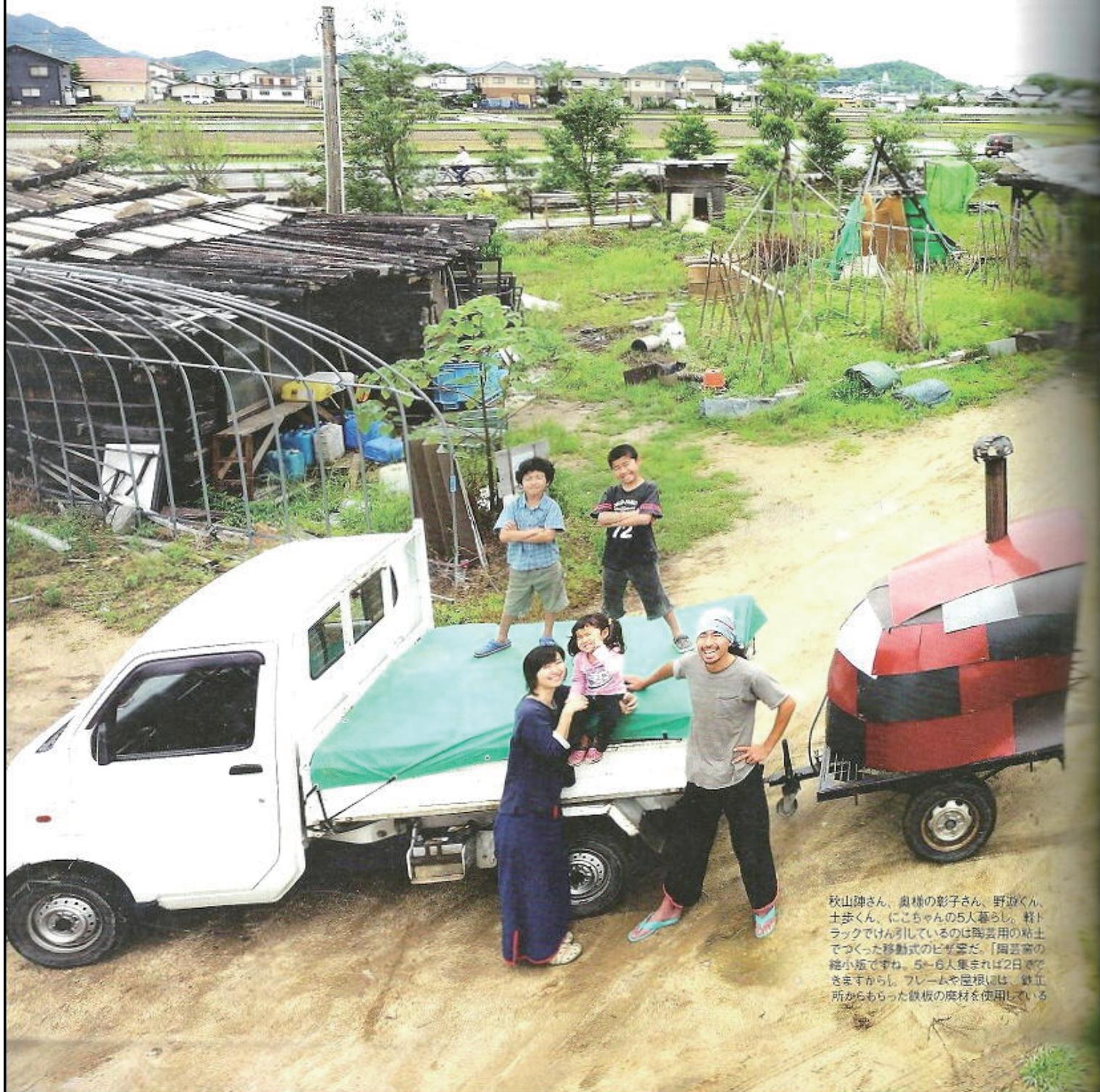
インタビュー
秋山陣さん

香川県丸亀市に廃材の家を建て、家族5人で暮らす陶芸家の秋山陣さん。

廃材の薪を燃やして食事をつくり、ガス代も水道代もタダ。

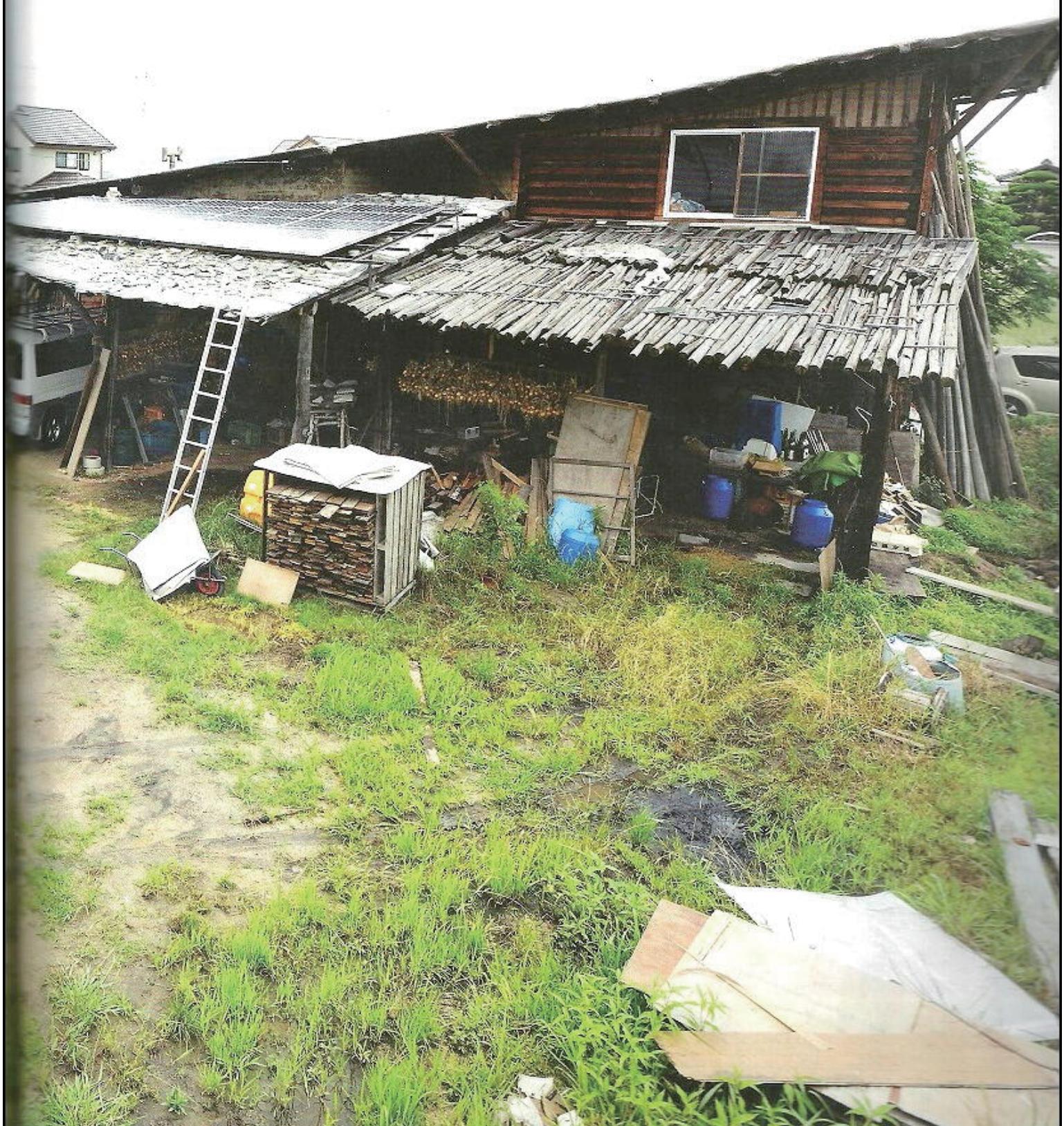
そんな悠々自適の暮らしに、未来のライフスタイルが見えてくる!

取材・文／編集部 写真／小林伸幸



秋山陣さん、奥様の彰子さん、野遊くん、土歩くん、にこちゃんの5人暮らし。軽トラックでけん引しているのは陶芸用の粘土でつくった移動式のビザ窯だ。「陶芸窯の純小版ですね。5~6人集まれば2日でできますから」。フレームや屋根には、鉄工所からあらった鉄板の廃材を使用している

うこそ

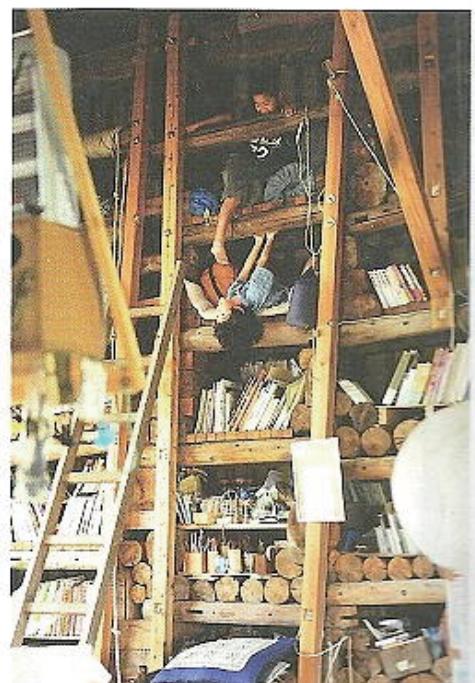




張り替え中の屋根には、レタスのトンネルに使われていた農業用ビニールハウスの廃材を重ねた。長さ100m以上もあるので棗ぎ目がなく、雨漏り対策も万全。重しには石や唐瓦を置いている

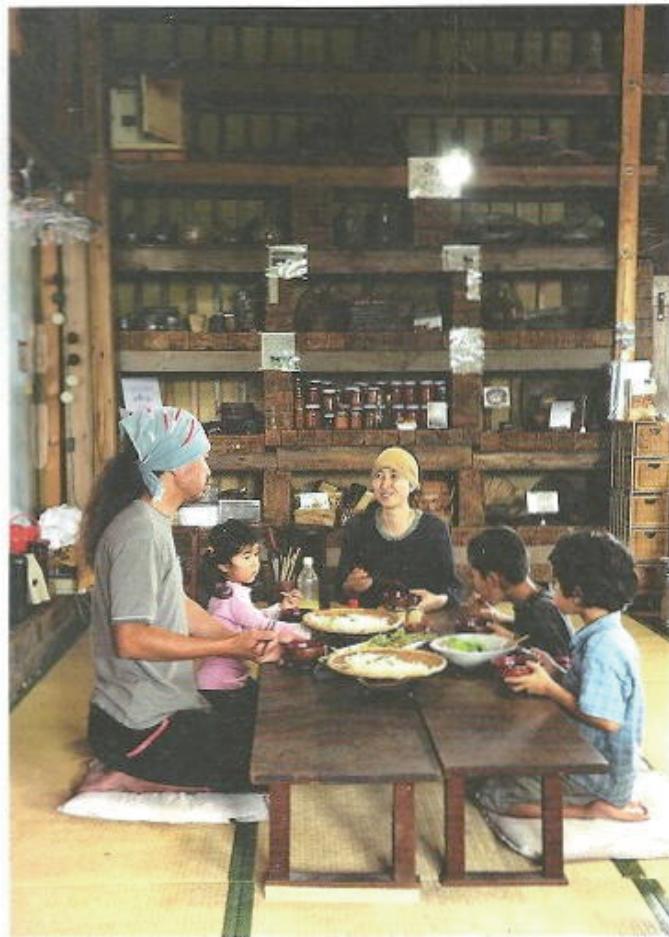
Series
これからの生き方
vol. 7

この暮らし 자체が革命のようなもの。
自分でやるしかないんですから。

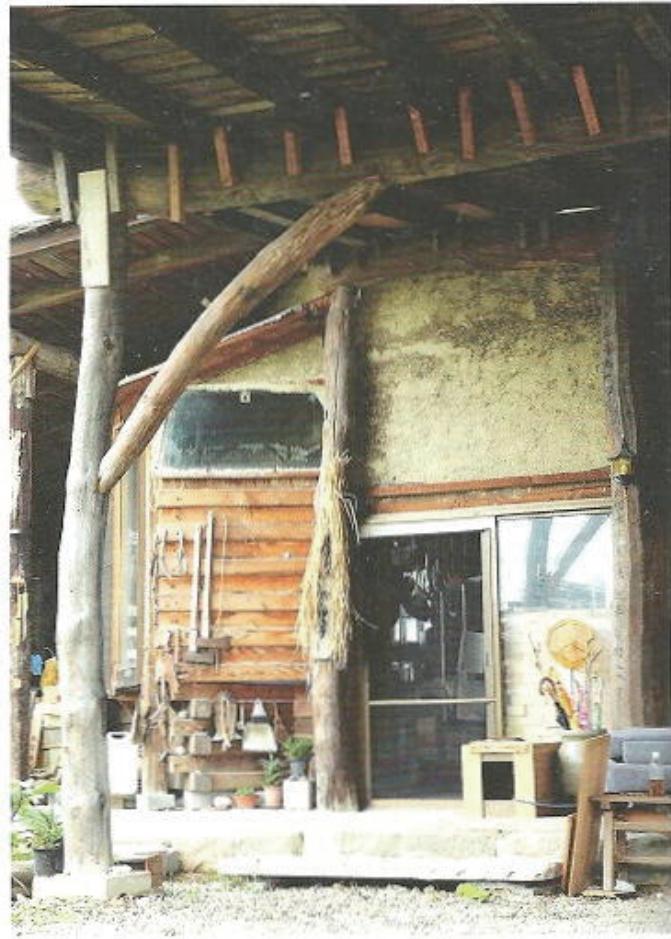


右・下／本業の商店は、「いまは大量生産する必要はないから、一個一個クリエイトすることを楽しんでいます」
上／万能薬として愛用しているビワエキス。「蒸めて飲むと腹痛や内膜症全般にいいし、しつしんや虫さされにも効きます。ビワの葉をホワイトリカーに漬けただけだから、副作用がないのもいいです!」

長さ50cmの廃材を積み上げた母屋。積み残した材のすき間は収納スペースや野遊くん、土歩くんの遊び場に!



食こそ廃材天国のライフスタイルの素。うどんは香川県産小麦粉「きぬきの夢2000」を使う。「自分たちが食べるものにはいい材料を使いたいからね。」



建築廃材と、陶芸用の粘土を使って建てた母屋。玄関左側の窓は、軽トラックのフロントガラスを再利用している。

薪のかまどと調理台が向かい合わせのオープンキッチンで、昼食のうどんをつくる。野遊くんは、仕込みから揉打ちまで大人顔負けの腕前。土歩くんとこちゃんも上手に包丁を使う





右上／毎日の風呂焚きは野邊くん、土歩くんの担当。焚き方は御前の薪焚きで自然と身についたそう。右下／畠には数十種類の野菜が育つ。「枯さないからミミズが土を疊かにしてくれて、ゴーヤもカボチャも器手に種を落として翌年また重生るんです」 左／業務用のガスレンジを改造して薪仕様にしたステンレスカマド。コトク部分のフタを開け、うどん屋からもらった割りばしや、大工さんからもらった木っ端、丸太を次々と燃げ込んでいく。そのラフな加減が格好いい



上／天ぷら油はボリタングで一度ゴミを濾過し、上澄みのいい油を再度、目の細かいスポンジ状のこし器に通してから使う。右／ハンドル横には燃料切り替え用のスイッチがある



「各自自身して学びたいという姿勢で弟子入りを希望するなら、こちらも本気で迎えますよ」という秋山さんと奥様の彰子さん。ピザ窯づくりなどのワークショップも好評だそう



毎日の熱源はすべて薪! 「自画杜撰」の廃材生活

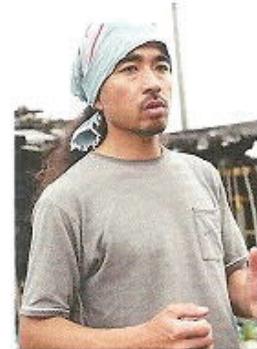
大型店舗が並ぶ市街地を抜けると、田園風景の中に一風変わった建物が見えてくる。古電柱を埋め込んだ畠床式の工房に土壁の母屋。片流れの屋根には一面にビニールシートが張られている。実は、これらはすべて廃材。陶芸家の秋山陣さんがセルフビルトした廃材ハウス、名づけて「廃材天国」だ。

家を建てようと思ったのはへゼヤン(長谷川豊)さんの「廃材王国」を読んでから。陶芸の窯焚き用にもらつた立派な廃材を、ただ燃やすのがもつたなくてね。

初めて廃材ハウスを建てたのは12年前。現在の家は2棟目だ。

1棟目はトタンやスレートでついたバラックみたいな家やつたから、ここは木や土でストローベイルハウスのようにしよう。木造家屋で使われる角材には規格があるから、同じサイズの廃材を積み上げるだけ高さもそろう。工事はすべてぶつけ本番。鎌鎌ぎもしていないし、壁はゴム手袋をして陶芸用の粘土を塗つただけ。粘性が強いから、ワラや砂を混ぜて割れないようにしてね。ご覧のとおり、ちゃんとした大工技術は習得していないけど、そういう家を目指してもいいんです。

大変なのは廃材集め。廃材といえども「タダ」ではもらえない。



Series これから生き方 vol. 7

あきやま・じん

香川県生まれ。陶芸作家。陶芸家・浦上善次氏の下で3年間修業の後、帰郷。自給自足生活や自然農などにあこがれ、2000年に香川県三豊市の山中で廃材の家づくりを開始。家族5人で年収約100万、月の光熱費数千円、食費1万円という準自給自足の生活を実現した。2005年には、香川県丸亀市内の農地に2棟目の廃材ハウスをつくり、「廃材天国」と命名。ライブや講演会などさまざまなイベントも開催している。<http://kadoya.ashita-sanuki.jp>

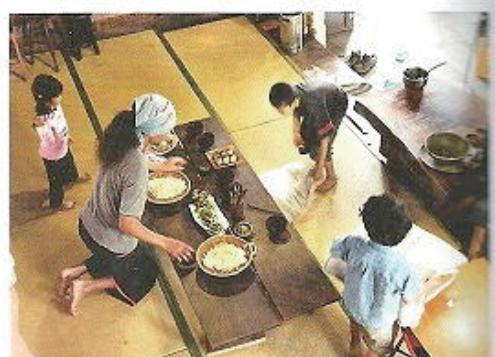
どんな廃材も決まつた引き受け手がいます。僕が欲しいものは、ほかに欲しがる人がいるんです。最初のうち、電話帳の端から順に解体業者さんに電話して、解体現場を見かけたら訪ねていきました。この廃材が欲しいと行動で示します。地下足袋を履いて解体作業を手伝つたこともありますよ。ただ、棟木のような長材はなかなか出ないので、出たときに連絡をもらえるようにしていました。

廃材天国では料理、暖房、風呂と毎日の熱源は薪。燃料も廃材だ。

でも、無理して薪の生活をしておつちやんが、伐採した木を50cmの長さに切つて持つて来てくれるから、それをかまじで焚くだけで、薪づくりもしなくていいし、ほんと快適。昔は選択肢がなかつたけど、いまは豊かで文化的な暮らしができる時代。こうでなきやいけないという思い込みを捨てれば実現できる暮らしなんです。

飲料水は手掘りの井戸水、屋根にはもらつたソーラーパネルを設置して電力自給のめども立つた。あとはクルマの燃料を自給できれど……と思った矢先に出会つたのが廃油で走る「天ぶら油力」。夢の脱化石燃料生活の始まりだ。

マツダの中古ディーゼル車を買って、和歌山県の自動車屋(満月屋)さんに、天ぶら油でも走るよう改造成してもらいました。後部座席に置いたボリタンクに天ぶら



うどんがゆで上がった! 秋山さんの声かけで全員一齊に食卓準備。キビキビとした動きがあっという間に片付いていく

油を入れて、軽油とスイッチできるようにして。天ぶら油を効率よく燃焼させる装置が工賃込みで15万、中古車が30万。車検代や輸送費など諸経費で15万円。燃料代がタダになるから、ほぼ相殺だね。天ぶら油は、セルフのうどん屋と割烹と約束して1週間に一斗缶1缶ずつ、月に8~9缶いただいているから、濾過しないと使えませんけど。燃費は1㍑で10km。ルーフキャリアにボリタンクを10個積んで屋久島にも行きましたよ。

ただ、古い車を自分でメンテし

なきやいけないし、天ぶら油を集めのも自分。僕はそんなカーライフにワクワクするけど、そういうことを理解して実践できる人でないと乗れないクルマですね。

庭の畑は不耕起、無肥料、無農薬。

20種類以上の野菜が元気に育つ。

食糧を自給自足できているわけ

ではないんです。うちの畑で採れ

ない野菜は買いますし、物量をつ

くるだけの自給自足はなく

て、その季節に自然が用意してくれれる恵みをいかにおいしくただ

くかが大事。近所の農家から余つた野菜をもらうことも多いけど、

うちは毎食、和洋中と徹底して味

を変えるから、軽トラック一台分

の野菜をもらつても困らない。大量のナスもベーストにして、ピザに載せたり、ソースづくりにも使

えるようにしておく。食事を工夫

するのも暮らしの楽しさですね。

食生活のおかげか、ご家族は医者にかかることがないそうだ。

食事が薬ですから。手づくりの味噌や米は栄養の塊。それを日常的に食べて免疫力を上げれば、薬がいらない体になるんです。

畑の野菜も人の体も、結局はその力を信じて待つしかない。野菜を大きく育てようと肥料を使いつけるから農薬が必要になる。子ども大人も常に勝ち負けにさらされているから、がんばりすぎてバランスを崩すんです。一流を目指せ、競争に勝つんだ。そういう「今まで型」の古い価値観を捨てて的外れの努力を止めれば、病気にならない。逆転の発想ですよ。

まさに「自画杜撰」。長女のことに

ちゃんが間違えて覚えた言葉だそ

うだが、杜撰(いい加減さ)を自画

自贅するとは言い不得妙。廃材天

國には最高の譽め言葉ではないか。

「こんな暮らしがいいんだよ」と

いつても、学校教育を眞面目に受けたきた人ほど簡単に納得しない。こういう生活は本人が望まない。どうしてかは、それが誰かが望まない。でも、将来をよく見てくるより、まずは玄米を炊いてみようやと。国やどこかの指導者が明るい未来を勝ち取ってくれるわけではなくて、自分がやれることをやって実現する。あなたはどういう暮らしがしたいか、覚悟を決めるこのほうが大事ですよ。